

企業トップに聞く！



第 8 回

厳しい経済状況のなか、躍進をつづける企業はどのような理念や方針を打ち立てているのか？ 企業トップの視点から俯瞰するものづくりのあり方、乗り越えてきた課題、今後の展望などについてお話をうかがうシリーズです。

株式会社 和井田製作所

代表取締役 名誉会長

和井田 淑生 氏

代表取締役 会長

和井田 光生 氏

代表取締役 社長

岩崎 年男 氏

砥粒加工学会 会長

株式会社アライドマテリアル

大下秀男

大下：本日は名誉会長、会長、社長のお三方と対談をさせていただくことになり、誠に光栄に存じます。御

社は創立以来、業界初の成形研削盤のNC化や世界初のロボット付工具研削盤の製品化を実現し、現在の



和井田俶生名誉会長(右)、和井田光生会長(左)

和井田ブランドを確立してこられましたね。まずは御社の沿革と名誉会長のご経歴からおうかがいしてもよろしいでしょうか。

和井田名誉会長(以下、名誉会長):わが社は昭和 8 年に、私の父である和井田二郎が東京都大田区蒲田に個人経営として創業したのがはじまりです。昭和 14 年に当時の高山市長からお声がかかり、東京と飛騨高山で工場を稼働させていました。私は翌年の昭和 15 年に東京で生まれましたが、昭和 19 年、疎開で事業拠点ともども飛騨高山に移ったのです。その当時は 600~700 人の従業員がいたと聞いております。「株式会社 和井田製作所」となったのは昭和 21 年で、会社も今くらいの規模に拡大したようですね。

大下:ということは、和井田名誉会長は物心ついたときから、この飛騨高山にお住まいなのですね。

名誉会長:そうですね、幼稚園から高校まで高山におり、大学入学の際に上京しました。早稲田大学の理工学部で、卒論は歯車の研究でした。

大下:大学を出られたあとは、すぐ和井田製作所に入社されたのですか？

名誉会長:いえ、大学卒業後はシチズン時計に入社しました。入社初年度に与えられたテーマは切削加工の基礎研究で、当時のシチズン時計では指導してくれる人も少なく、独自で研究を続ける日々でしたね。入社 3 年目からは研削の研究に携わっていました。30 歳のときに父が病気になったこともあり、こちらに戻ってきたのです。

和井田製作所を 支えてきた製品とは

大下:幅広い分野で製品作りをなさっている御社には各ジャンルに強力なライバル会社が存在すると思うのですが、その中であって御社は独自の技術が光る「和井田ブランド」を確立されておられますね。その礎を築いてきたと思われる代表的な製品はありますか？

名誉会長:たとえば昭和 12 年から平成 16 年まで製造していた「シリンダーボーリングマシン」ですね。自動車エンジンのシリンダ内径を再生ボーリングするものです。コンパクトなうえ、1 台のモータでスピンドルの回転、クイルの自動送り・停止・戻りが可能です。第二次世界大戦前から生産を開始していたこともあり、戦時中は軍用トラックの修理などを目的に東南アジアはじめ各国にも輸出されていたそうです。

大下:当時としては、かなり画期的な製品ですね。

名誉会長:工具として超硬合金を使っているのも、それを研削するためにダイヤモンド砥石を用いた装置を具備し、当時としては高精度な中ぐり加工を実現していました。わが社の高精度技術の基礎ともなった製品です。これが現在の工具研削盤、ジグ研削盤などにつながってきています。

大下:現在の主力製品はどういったもののでしょうか。

和井田会長(以下、会長):ひとつ目の大きな柱は全自動 CNC 刃先交換チップ研削盤シリーズで、スローアウェイ(刃先交換用)チップの外周研削盤や溝入れ工具研削盤で構成されています。日本の市場では 9 割のシェアを持っています。2 つ目の大きな柱は精密金型用の CNC プロファイル研削盤や CNC ジグ研削盤で、日本、アジアでは 6 割のシェアを持っています。第 3 の柱として育ててきているのが半導体関連研削盤で、そのひとつが超精密平面研削盤の「GCG300」です。固定砥粒による鏡面研削で、メーカーとしては後発ですが、ユーザーと協力しながら開発を進めてきました。半導体関連機械として高い評価を得ており、今後の当社の戦略製品として位置付けています。

現在ユーザーの要望や要求レベルはどんどん高くな



岩崎年男社長

ってきており、わが社は精密研削分野を手掛ける会社として、今後はその加工領域をもっと広げていきたいと考えています。

大下:岩崎社長は4年前にシチズンからこちらに移られたそうですが、外部から来られた方からご覧になった「和井田製作所」の印象はいかがでしたか？

岩崎社長(以下、社長):そうですね、客観的に見ると、和井田製作所に特別・格別な部品組立レベルがあるわけではないのです。ただ、「研削」「研削盤」について、社員がすみずみまで本当によく知っている。これが和井田製作所の強みだと思いますね。

我々が手掛けているのは機械作りですから、将来的にもずっとこのままです。個々の技術も、特別なものではないのです。大切なのは、それらをどう組み合わせるかですね。顧客サービスをベンチマークに、99%既存の技術に1%の新しい要素を加えるのです。

大下:すべてを膨らませる必要はないのですね。ところで、御社のホームページで「開発委員会制度」という言葉を拝見したのですが、これはどういったものなのでしょう。

会長:ユーザーや大学、サプライヤー、そしてわが社で協力して開発していく制度です。たとえば評価などわが社だけではクリアできない分野もありますし、どの加工法が最適かを調べるため、大学の先生に解析していただいています。実際にわが社の製品を使われ

るユーザーの意見も聞きたいですしね。守秘義務もあるのですべての情報をつかむことはできませんが、こういった活動を通して、ユーザーへ新たな価値をご提案することを目的としたものです。

和井田製作所が手がける 「ものづくり」教育

大下:御社はかつて、ドイツのマイスター制度を模したものづくり教育の場をつくられていたとうかがったのですが…。

名誉会長:ありましたね。ただ、それは戦前のことです。戦後はなくなってしまいました。

大下:近年も、御社はものづくり教育に尽力されているようですが。

名誉会長:MONO-LAB-JAPAN プロジェクトですね。東京大学とわが社が主催する、新しいものづくりを提案する産学共同プロジェクトです。もともとは東大の附属学校である中高一貫校の先生が始められた試みにわが社が賛同してスタートしました。技術分野やものづくりに興味を示さない子供が増えていることへの対応策です。

大下:非常に興味深いプロジェクトですね。



大下会長

社長: わが社は製造業に携わる会社ですから、この分野に関心をもつ人材の育成も大切なことです。創立80周年に向けて、わが社がこの業界で80年培ってきたことを役立たさせていただけたらと。

名誉会長: 私は「面白そうだな」と思って始めたんだけどね(笑)。

社長: 私は大義名分をつけなければならない立場です(笑)。

大下: 具体的にはどのような活動をされているのですか？

社長: 東京をはじめ各地でワークショップも開催しておりますし、わが社に学生を招いてもものづくり体験をしていただくことも行っています。工場内に急遽そのためのブースをつくって、学生さんの勉強の場にしていきます。中学3年生や高校1年生の学生さんに対しては、まずはものづくりに興味を持ち、楽しいと思ってもらえるカリキュラムを組んでいます。

大下: 私も部下に常々「独創性を持って」と言ってきたのですが、なかなか難しいものですよ。

会長: そうですね、「教える」ということは確かに困難です。でも子供たちにちょっとしたアドバイスを与えると、どんどん面白いアイデアが出てきたりもするんですよ。

原点にかえって、彼らがやる気になるような教育とはどういったものかを考えることが今後の課題ですね。

名誉会長: 自分のことを振り返ると、やらされていたのではなく「面白い」と思ったからこそ、のめりこむことができた。今の若者たちにもそういった機会を与える一助になるよう尽力していきたいですね。

今後の学会に 期待することとは？

名誉会長: やはり情報の場としての存在ですね。失礼かとは思いますが、各ユーザーを見ると、生産技術が非常に落ちている気がするのです。我々が若い頃よりも低いのではないかと。こういった状況を改善するためにも、学会の場などを通じて先生方に教えていただける機会があるというメリットは大きいですね。

また問題を抱えているユーザーもたくさんいますから、そういった方たちが相談を持ち込みやすいような環境を、学会でご用意いただきたいと思います。

大下: 当学会は産業界の会員が多いことも特徴ですからね。本日は貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー後記



今までこの企画は企業トップと学会長との二名での対談という形で行ってきましたが、今回は初めて複数名様との対談という形態になりました。会社沿革や企業理念などは和井田倅生名誉会長様より、近年特に力を入れておられる海外ビジネスは和井田光生会長様より、現在の経営方針や経営状況は岩崎年男社長様より、懇切丁寧な話をお伺いすることが出来、同社のものづくりや技術などに対する考え方や取り組みが良く理解でき、大変参考になりました。特に和井田名誉会長様が主体となり進めておられる高校生を対象としたものづくり教育支援活動は、今後の日本の製造業を下支え、さらには活性化することに繋がる大変重要な取り組みの一つと思われ、同社の考え方や活動のスケールの大きさに感心させられました。最後になりましたが、ご多忙なところを長時間の対談に応じていただきましたご三名様はもとより、工場を隅々までご案内いただきました洞口秀臣取締役様にも厚くお礼申し上げます。

(大下)